

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年8月31日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 日本学術振興会特別研究員(PD)

氏 名 上 峯 篤 史

助 成 の 種 類	平成25年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	Fifth Arheoinvest Symposium	
発 表 題 目	Simultaneity and Date of Lithic Artifacts in Sanukite Resource Site, Japan	
開 催 場 所	ルーマニア・ヤシ市・アレクサンドル=ヨアン=クザ大学	
渡 航 期 間	平成25年 8月18日 ~ 平成25年 8月26日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	200,000 円
	使用した助成金額	200,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳	交通費(航空運賃)の一部 200,000 円 ----- ----- ----- -----
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 昨今の経済状況のあおりを受けて研究費の削減が続き、新しい研究成果の蓄積と、その公開にかかる費用のバランスをとることが難しくなっている。ところが本助成で成果の公開費用の大半をまかなえたことにより、手持ちの資金を資料調査や分析に当てることが可能となった。本助成は、京都大学で培われた知の財産を埋没させないために、今後も必要不可欠な制度であると考えます。	

成果の概要／上峯篤史

【本学会の概要】

本研究集会は、「石器に書きとめられた歴史」という統一テーマのもと、石器研究における動作連鎖的アプローチ、鉱物学的アプローチを中心に議論された。合計9つあるセッションは、石材獲得方法、先史時代の交易、石器の使用痕研究、石英の顕微鏡観察、黒曜石研究など多岐にわたった。参加者も開催地ルーマニアをはじめ、カナダ、ベルギー、ポーランド、ウルグアイ、スペイン、アメリカ、アルゼンチン、イタリア、フランス、日本など多彩であった。会場には50名程度の研究者が参集したほか、期間を通じてインターネットによる世界同時中継が実施されており、それを利用しての参加者もあった。各国の研究者が最先端の研究成果を示すことで、石器研究の到達点と、今後の研究展望が模索された。

【発表の概要】

Fifth Arheoinvest Symposium の SESSION 1. RAW MATERIAL EXPLOITATION STRATEGIES: MINING AND SURFACE COLLECTING では、石器の材料となる原石（石器石材）の獲得方法を主題とし、石材採掘や地表面採取に関わる10本の研究が発表された。申請者は当該セッションにて、**Simultaneity and Date of Lithic Artifacts in Sanukite Resource Site, Japan** と題した口頭発表を行った。

本発表では、石器石材の採掘に関わる遺跡（原産地遺跡）を研究するための、新たな方法を提示した。原産地遺跡は先史時代の経済を語るうえで不可避の研究対象であるが、原産地遺跡の考古学的研究はきわめて難しい。膨大な遺物が出土し、かつ様々な時代・時期のものが混在して出土するため、出土資料を歴史的な脈略に位置づけることができないためである。これを克服するため、学際的な視点に立った「資料選別法」を提示した。そして「選別」された各カテゴリーに複合的な年代比定法を掛け合わせることで、縄文時代早期末にさかのぼる石材採掘坑を特定したほか、後期旧石器時代～縄文時代草創期における原産地遺跡における人類活動を予察した。縄文時代早期末の石材採掘坑は、近畿地方における二上山北麓産サヌカイトの流通状況を鑑みれば、石材流通の転換と原産地遺跡の鉱山開発が連動していると考えられた。

【発表の成果】

以上の発表について、小野昭氏（明治大学）、Maciej Pawlikowski 氏（ポーランド、AGH 科学技術大学）より質問があった。両者は本方法を利用した研究の進捗状況や、申請者がスライドにて提示した石器資料について照会された。また申請者の提示する方法の前半部（風化・ダメージ）と後半部（年代決定）との関連性についての質問もあり、両者に全く矛盾がないことを説明した。また発表終了後、Otis Crandell 氏（Babeş-Bolyai 大学）から研究方法に関する追加のコメントをいただき、討論した。

申請者は本学会において、日本の石材原産地遺跡の概要を報告するのではなく、世界中の原産地遺跡が共通して抱えているはずの問題点を指摘し、それを超克するための方法を提示した。こうした方法論的な指摘と、精密な議論は、参加者には新鮮に受け止められたように感じた。また申請者の発表する研究法の成否を問うことを目的にしていた。これについてはいくつか重

要な指摘は受けたものの、おおむね好意的に受け止められたように感じた。しかしながら小野氏が指摘するように事例研究が少ない点は否めず、今後は事例研究の蓄積と論文化が課題となる。本会では Maciej Pawlikowski 氏が本研究と関連する発表をされており、岩石学的視点からの研究成果に学ぶことも多かった。

また発表では、日本国内の原産地遺跡研究が開発の危機に瀕している状況にも触れた。膨大な考古資料の活用方法が見つからず、香芝市のように地中に資料を投棄する自治体さえある。申請者はこの状況を打破するため、原産地遺跡の資料から歴史を描くための研究方法を模索してきた。これについて、本会参加者の数人から照会があり、各国の原産地遺跡の保存と活用状況について学んだ。また会期中に訪問した MIORCANI フリント採掘址の状況も文化遺産学的に興味深いものであった。

【発表の反省点】

申請者の発表は会期の初日、最初から 3 番目という早期に行われたため、会場設備の段取りが模索段階であった。そのあおりを受けて、パワーポイントファイルが淡く投影されてしまい、モノクロ画像をベースとする図や、明るい色調の図が聴衆にとって見づらいものとなってしまった。発表開始前に、映像を投影してのテストをオーガナイザーに依頼すべきであった。

また発表で使用したスライドには石器の写真をいくつか用い、スケールを映し込むことで縮尺を示した。ところがスライドの投影サイズが予想以上に小さく、結果、Maciej Pawlikowski 氏からスケールが見にくい点を指摘された。他の発表からと、表示が小さくても視認しやすいスケールのデザインが学べたので、今後はそうしたスケールを用い、投影環境の影響を受けにくいスライド作りを目指したい。